対人関係の視点からみた山村留学生の“心の成長”
—写真投影法による分析から—

山下　稔哉*・仲程　誠**・佐古三代治**・木谷　秀勝

“ Psychological Development ” of Children Attending to a Rural-Experience-Program in Perspective of Interpersonal Relationship
—An Analysis by the Photo Projective Method—

YAMASHITA Toshiya*, NAKAHODO Makoto**, SAKO Miyoji**, KIYA Hidekatsu
(Received January 15, 2008)

キーワード：山村留学、心の成長、対人関係発達、写真投影法、対人撮影指数(IOPI)

1．問題と目的

山村留学とは、都市部の子どもが農山村に住民票を移して一定期間定住し、地元の子どもとともに学び遊ぶ経験を日常生活の中で行うものである（川前・玉井, 1997）。高度経済成長期を経て日本各地で急速な都市化が進行していた昭和 51 年、「子どもの健全な成長のためには“自然体験”が欠かせない」として、当時の長野県八坂村（現・大町市）で都市部の小中学生の受け入れが始まったのがわが国における山村留学の最初である（財団法人育てる会, 2001）。同様の取り組みは各地に広がり、平成 17 年度現在、山村留学を経験した子どもは、全国 155 市町村の 285 校で、のべ 13, 288 人にのぼる（財団法人育てる会, 2006）。山村留学がこのように広く全国に波及した理由のひとつとして、“自然体験”の場としてだけでなく、子どもが“心の成長”を遂げる場として山村留学が注目されるようになったことがあげられる。

子ども時代の人間関係が希薄になっている都市部とは対照的に、山村留学の対象地域となる農山村では、現在でも緊密な共同体意識に支えられた地域社会が機能し、小規模校を中心とした田舎の子ども社会には学年をこえて関係を結ぶ異年齢集団が残っていることが多い（玉井, 2006）。さらに、共同生活を基本とする寄宿型の山村留学の場合、留学生は長期にわたって寝食をともにするため、仲間たちとの間に密度の濃い関係が結ばれる。このような環境は、都市部で失われつつある緊密で豊かな人間関係を提供し、子どもが内面性・社会性を発達させるうえで重要な役割を果たし得ると考えられる。

従来の調査からも、山村留学によって変わった面として留学生自身が「自主性の発達」や「生活習慣の形成」をあげていること（中森他, 1998）、山村留学修了生が「精神的な成長」や「人との出会い」を山村留学の良かった点と考えていること（川前・玉井, 1997）、

＊山口大学大学院教育学研究科　＊＊岩国市教育委員会本郷山村留学センター

山村留学生の保護者が子どもの変化について、「協調性を養うことができた」、「思いやりや人間関係が深まった」など対人関係の成長をあげるケースが多いこと（玉井・川前, 1998）などが示されている。こうした結果は、現代の山村留学が、“自然体験”にとどまらず、留学生に“心の成長”の機会を提供していることを強く示唆している。

そこで筆者らは、山村留学を通して子どもたちの内的世界がどのように変化するかを心理学的な立場から理解することによって、現代において山村留学が果たす役割を、留学生の“心の成長”という視点から捉え直すことを目的として研究を行う。

具体的な方法論として、今回の研究では写真投影法を活用する。その理由として以下の４点があげられる。

①野田（1988）によれば、写真は子どもの内的世界に触れる手法として有効であり、子どもたちにフィルムを渡して好きなものを自由に撮影してもらう写真投影法を通して、子どもたちの体験世界が多面的に再構成され得ること。

②筆者らが行った予備研究でも、山村留学生が撮影した写真には、その時々の“対人関係”や関心事を中心とした留学生の内的世界が色濃く映し出されていること。

③自由に写真を撮るという課題は、子どもが「何かのテストをされている」と感じる心配が少なく、心理的侵襲性が低いと期待されること。

④投影的手法として一般的な描画法は絵が苦手な子どもには辛い課題であるが、写真は苦手さを感じる可能性が低いと予想され、留学生に楽しみながら取り組んでもらえると期待されること。

以上の理由からである。

２．岩国市本郷の山村留学の概要

研究のフィールドとしたのは、20 年以上前から山村留学が行われていることで知られる、山口県岩国市の本郷と呼ばれる地域である。本郷は山口県の北東部に位置し、中国山地で最も山深い地域のひとつである。人口はおよそ 1,300 人、基幹産業は農業である。昭和 62 年度に当時の本郷村の事業として山村留学をスタートさせ、平成 18 年に岩国市と合併して現在に至っている。したがって、現在の本郷の山村留学は、岩国市が行う公的な教育事業として位置づけられている。

本郷では、村の時代から始まって現在まで、毎年 20 人前後の留学生を受け入れている。留学生の出身地域は、中国地方だけでなく、東京、大阪、福岡など全国の大都市圏に及んでおり、その取り組みの継続性と提供する体験の質において高い評価を受けている（山下他, 2007）。

本郷に留学する子どもたちは、集落の中心部に設けられた本郷山村留学センターに寄宿して共同生活を行い、寝食をともにしながら地元の小・中学校に通う。留学センターの職員体制は、所長（常勤）1 名、次長（非常勤）1 名、指導員（非常勤）2 名で、夏、冬、春の休みを除いた全ての時間、一部で小・中学校教諭の協力を得ながら、衣食住、健康管理、勉強、余暇活動、身辺自立など生活のすべてにわたって子どもたちの指導・サポートを行っている。留学生たちは、年齢も生活背景も様々であるため、留学当初は慣れない共同生活にとまどう場合も多いが、遊び、喧嘩、職員によるサポートなどを通して次第に打ち解け、やがて緊密な関係を結ぶようになる。留学期間は 1～数年で、田植え、夏祭り、奉納

相撲大会、かまくら作りなど、集落で行われる行事に年間を通して参加しながら、地域の住民とも交流を深める。

３．方法

３－１　対象となる児童・生徒

研究に参加したのは、平成18年度に本郷に山村留学した小中学生23名である（表1）。内訳は小学生（小3～小6）17名、中学生（中1と中3）6名で、男女別に見ると、男子12名、女子11名である。

表１．研究に参加した山村留学生

学年	男子	女子	
小3	1	1	
小4	1	1	
小5	2	2	
小6	3	6	計１７名
中1	2	1	
中3	3	0	計　6名
	計12名	計１１名	総計２３名

撮影にあたっては、1回のセッションにつき、留学生1人に1台ずつ“使い捨て”カメラ（27枚撮り）を渡して、「何でも好きなものを自由に撮ってよい」、「写真ができたら見せてほしい」と伝えて、了解を得た。また、学校に私物を持ち込むのは好ましくないので小・中学校は撮影対象外とすること、撮影期間は1回のセッションにつき1週間とすることを伝えた。

撮影は、以下の時期に計4回のセッションを行った。

第1回	5月 8～14日	山村留学が始まって1ヶ月。
第2回	7月 9～15日	夏休みの帰省前、留学3ヶ月。
第3回	12月 11～17日	年末年始の帰省前、留学8ヶ月。
第4回	2月 22～28日	年度修了前、留学11ヶ月。

留学生には自由に写真撮影をしてもらう一方、筆者は継続的に本郷を訪れ、山村留学生たちと時間や活動を共にすることを通して、それぞれの留学生の特徴や山村留学を通した対人関係の変化、内的な成長の様子などについて質的な面からの理解を深めた。

３－２　分析方法：対人撮影指数について

表2に各セッションに参加した留学生の数と撮影された写真の枚数を示す。撮影に参加した山村留学生の実数は23名であるが、年度途中から留学した者や、年度途中で留学を終えた者がいるため、各セッションの参加人数は、21名あるいは22名となっている。1人あたりの撮影枚数の平均値は1セッションあたり24.9±4.1枚、最頻値は27枚で、ほとんどの留学生が27枚撮りフィルムをほぼ使い切っている。各セッションの総撮影枚数は、おおむね500～600枚であり、4回のセッションを合計した年間の総撮影枚数は2,175枚である。

表２．セッションごとの参加留学生数と撮影枚数

セッション	第1回 H18年 5月	第2回 H18年 7月	第3回 H18年12月	第4回 H19年 2月
参加留学生数（人）	２１	２２	２１	２２
撮影枚数（枚）	５５６	５９０	５５１	４７８

総撮影枚数　２１７５枚

撮影枚数／１人・１セッション	
平均値±SD	２４．９±４．１ 枚
最頻値	２７ 枚

図1に、撮影内容の内訳を示す。手ブレや露光不足などが原因で撮影内容が判別できなかった62枚を除く2,113枚を実撮影枚数とする。最も多かったのは「人物」を含む写真で70%を占める。そのほとんどは留学生仲間のポートレート、留学生の日常生活や行事のスナップ、仲間の集合写真である。身近にいる人にカメラを渡して自分（あるいは仲間と一緒にいる自分）を撮影してもらった写真も多く認められる。その他、留学センターの指導員や学校の先生、留学生以外の地元の友だちなどにもしばしばカメラを向けている。次に多いのは「自然物・風景」の15.7%である。クワガタムシ、近所のイヌ、ツバメの巣といった身近な対象から田園風景、青空、雪景色などの遠景まで幅広い対象に目を向けている。「個人の持ち物」は8.0%で、自分の机、野球帽、表彰状、ぬいぐるみ、フィギュアなどが含まれる。「留学センター関係」は6.0%で、留学センター全景、正面玄関、食事のメニューなどが含まれる。

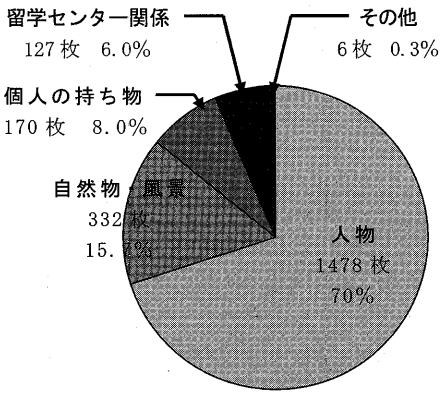


図1．山村留学生の写真の撮影内容
（實撮影枚数 2113枚）

全体として認められる最も顕著な特徴は、「人物」を含む写真の割合が70%と非常に高いことである。農山村に留学して、豊かな自然に恵まれた環境に暮らしながらも、子どもたちが最も頻繁にカメラを向ける対象は、「人物」、あるいは「人物」を含む情景である。このことから、山村留学生にとって“対人関係”が重要な関心の対象であることが示される。

そこで、“対人関係”が反映された写真について質・量的に分析するための試みを実施する。具体的な分析方法として、独自に開発した『対人撮影指数（Interpersonally Oriented Photography Index: IOPI）』による数量化を活用する。『対人撮影指数（IOPI）』は以下の式で表される。

$$『対人撮影指数（IOPI）』= (P-S) / (T-U) \times 100$$

T： ある留学生が1セッションで撮影した写真の総数（Total）
P： 人物（Person）が写っている写真の数
S： 自分自身（Self）で自分にカメラを向けて撮影した写真の数
U： 内容が判別できない（Undetermined）写真の数

例として、表3に、ある留学生が1セッションで撮影した写真の内容を示す。この場合、撮影した写真の総数（T）は27、人物が写っている写真の数（P）は17、自分自身で自分にカメラを向けて撮影した写真の数(S)は1、内容が判別できない写真の数(U)は2となる。

「人物」が写っている写真は、通常なんらかの“対人関係”を反映しているとみなすことができる。カメラの所有者本人だけが写っている写真であっても、誰かにカメラを渡して撮影を依頼しているのであれば、“対人関係”が反映されていると考えられる。しかしながら、カメラの所有者本人だけが写っている写真の中に、自分自身で自分にカメラを向け

て撮影した、いわば“自作自演”の写真がしばしば認められる（表 3. No.21)。この種の写真には“対人関係”の関与を認めることができない。したがって、自分自身で自分にカメラを向けて撮影した写真の数（S）を「人物」が写っている写真の数（P）から差し引いた値（P-S）を、そのセッションにおける“対人関係”を反映した写真の数と考える。『対人撮影指数（IOPI)』は、(P-S）を、実撮影枚数【総撮影枚数(T)から撮影内容が判別できない写真の数(U)を差し引いたもの】で割った値に 100 をかけて表すものとする。

表 3 の場合、IOPI＝(17-1)/(27-2)×100＝(16/25)×100＝64 と算出される。

表３．ある留学生が１セッションで撮影した写真の内容

No.	撮影内容		No.	撮影内容		No.	撮影内容	
1	農村風景	-	10	人物	P	19	人物	P
2	農村風景	-	11	人物	P	20	人物	P
3	農村風景	-	12	自分の机	-	21	自分（自分で撮影）	P(S)
4	人物	P	13	？（露光アンダー）	U	22	人物	P
5	人物	P	14	？（露光アンダー）	U	23	人物	P
6	人物	P	15	野球帽	-	24	人物	P
7	人物	P	16	手ぬぐい	-	25	人物	P
8	人物	P	17	スポーツウェアー	-	26	人物	P
9	人物	P	18	農村風景	-	27	人物	P

撮影総数（T）：27 枚　　人物が写っている写真（P）：17 枚
自分自身で自分を撮った写真(S)：1 枚　　内容が判別できない写真(U)：2 枚

４．結果

４－１　小学生が撮影した写真の分析

「写真には子どもの内的関心の対象が表れている」とする立場をとるならば、『対人撮影指数（以下 IOPI)』が高いほど、子どもの“対人関係”への指向性は高く、逆に IOPI が低いほど、子どもの“対人関係”への指向性は低いと考えることができる。この考え方に基づいて、まず小学生の写真を対象に分析を行う。図 2 は、セッションごとにそれぞれの留学生について IOPI を算出した結果とその平均値をプロットしたものである。小さいドットは留学生 1 人 1 人の IOPI 値を示す。それらに基づいて算出した各セッションごとの平均 IOPI 値を大きいドットで示す。

４－１－１　平均 IOPI 値の推移から理解できる全体的な変化

山村留学スタート 1 ヶ月後の第 1 セッションでは、平均 IOPI 値は 68.3±22.8 と年間を通して二番目に高い値を示す。初めての環境で新しい仲間との生活が始まり、留学生たちが友だち作りなど“対人関係”に敏感になっている様子がうかがえる。

夏休み前の第 2 セッションになると、平均 IOPI 値が 46.6±19.3 にまで低下する。このことは、“対人関係”を反映した写真の割合が 1 セッションあたりの撮影枚数の半分以下になっていることを示している。代わって多くカメラが向けられるようになるのは「自然物・風景」である。夏は農山村の自然が最も光り輝く時期である。友だちとの関係がある程度安定して、新しい生活にも慣れてきた留学生は、この時期に“対人関係”から少し離れて、それぞれに田舎の豊かな自然に目を向けるようになることが示唆される。

12月の第3セッションでは、再び平均IOPI値は67.4±22.6と上昇に転じる。本郷の冬は厳しく、この時期、遊びの中心が室内に移り、留学生相互の接近度が高まることが背景の一つとしてあげられる。

年度修了前の第4セッションで平均IOPI値は74.3±27.9と年間を通して最大になる。留学を続ける仲間。町に帰る仲間。1ヵ月後に迫った別れを前に、留学生が1年間を通して育んだ友情を確かめ合うように互いの写真を撮り合っている様子が、この数字にはっきりと表れている。

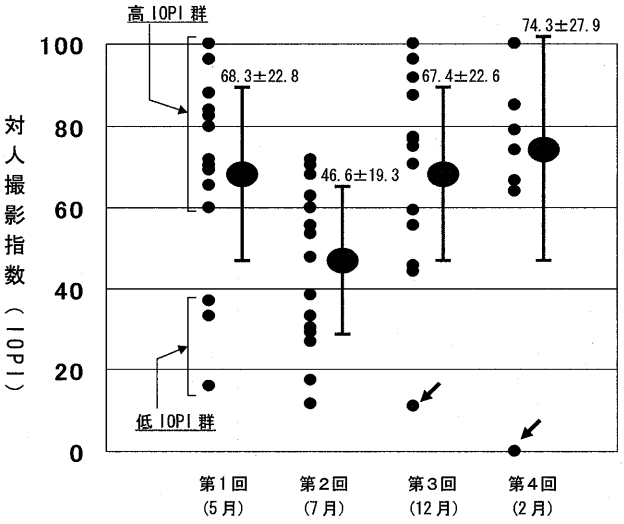


図2．山村留学生（小学生）が撮影した写真の対人撮影指数（IOPI）

これらの結果から、山村留学生の内的関心の対象は一年を通して変化しており、友だち作りが重要な留学開始時と友だちとの別れを前にした留学修了前には、特に“対人関係”に強い関心が向けられる一方、仲間作りが一段落して“対人関係”が安定する夏の時期には、身の周りの豊かな自然や生き物に関心を向ける傾向が強くなることが示唆される。

4－1－2　IOPI値の散布様式から理解できる個別の特徴

個別のIOPI値（小さいドット）に注目して、その散らばり方をセッションごとに検討することによって、“対人関係”への関心が表出される程度は、留学生によってかなりの個人差があり、時期によっても変化することが示唆される。

山村留学スタート1ヶ月後の第1セッションにおいては、1人1人の留学生のIOPI値が、2つのグループに分かれて分布している。すなわち、“対人関係”が反映された写真を多く撮影する『高IOPI群（IOPI値≧60）』を構成する11名と、“対人関係”が反映された写真をあまり撮影しない『低IOPI群（IOPI値＜40）』を構成する3名である（図2、第1回セッション参照）。山村留学をはじめて間もないこの時期、多くの留学生は、友だち作りのため、“対人関係”への関心を積極的に表出するが、一方、同じ状況の下でも“対人関係”への関心が表出されにくい留学生が一定数存在することが示唆される。

夏休み前の第2セッションでは、IOPI値を示すドットは、およそ10～70の間に、ほぼ一様に分布している。『高IOPI群』の位置がグループ全体として下方にシフトした結果、『高IOPI群』と『低IOPI群』の境目が判別できなくなった形である。

12月の第3セッションでは、大部分の留学生がIOPI値40以上の範囲にほぼ均等に分布している。『低IOPI群』はグループとしては認められなくなり、1名（IOPI＝11.1、矢印で示す）だけが全体から離れた位置に存在している。

年度修了前の第4セッションでは、その傾向がさらに顕著になる。ほとんどの子どもがIOPI値60以上の範囲にまとまるのに対して、やはり1名（IOPI＝0、矢印で示す）が、全

体から大きく離れた位置にある。この第4セッションでIOPI値0を示す児童は、第1セッションで『低IOPI群』を構成した3名のうちの1人である。

4－1－3　『高IOPI群』の個別分析から：『他者依存型』と『自立型』

第1セッションで『高IOPI群（IOPI値≧60）』を構成した11名のIOPI値を個別に検討した結果、『高IOPI群』に2つの下位グループがあることが示される。

図3は、第1,2,3セッションにおけるIOPI値の推移を下位グループ別に示したものである。第4セッションは全員のIOPI値が60以上の範囲に収束して、下位グループ間の差が判別できなくなるため省略する。

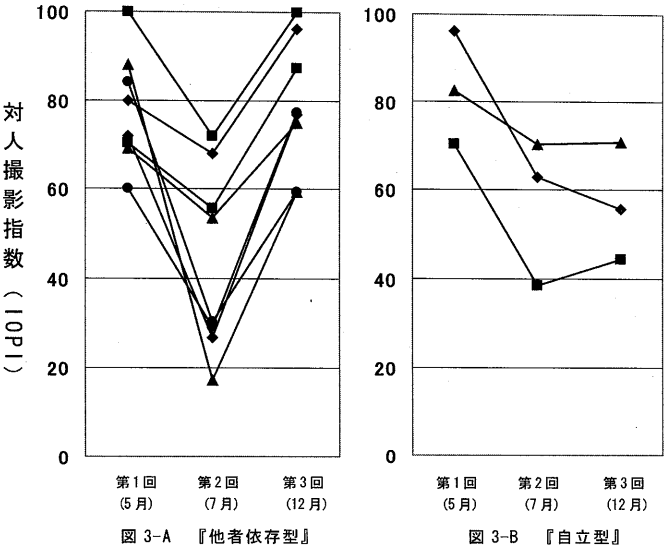


図3．高IOPI群の対人撮影指数（IOPI）の推移

第一の下位グループを構成するのは、図3-Aに示す8名で、IOPI値の動きが平均IOPI値の変動パターン（図2参照）と一致するのが特徴である。すなわち、留学当初に高い値を示し、夏に低下して、冬に再び高くなる。留学生全体の平均的な“対人関係”の変動パターンと一致した動きを見せることから、この下位グループを『他者依存型』とする。『他者依存型』に属する8名のうち7名は小学4年生以下か今年度初めて山村留学した子どもで、この年度の山村留学生集団の中では、“下級生”あるいは“新人”の立場にある。

第二の下位グループを構成するのは、図3-Bに示す3名で、IOPI値の動きが平均IOPI値の変動パターンとは異なるのが特徴である。すなわち、夏に低下して安定し、その後、冬に入っても上昇に転じない。この3名はいずれも留学2年目あるいは3年目の6年生で、この年度の留学生集団の中で“リーダー”的な役割を担っている。周囲の動きに振り回されずに自分のペースを保っていることから、この下位グループを『自立型』とする。

これらの結果を実際の留学生の姿と照らし合わせると、以下のように理解することができる。山村留学生は“対人関係”に積極的な場合が多いが、その中にも、主として周囲の動きに合わせることによって適応を果たしていると思われるグループ：『他者依存型』と、周囲と良好な関係を持ちながらも、自分自身のペースをつかんで主体的に行動することができるグループ：『自立型』が存在しており、後者が主として“リーダー”的な役割を果たしている。

4－1－4　『低IOPI群』の個別分析から：『対人成長型』と『孤立型』

図4に、第1セッションで『低IOPI群（IOPI値＜40）』を構成した3名のIOPI値が年間を通してどのように変化するかを示す。3名のうち2名（実線）は、セッションごとにIOPI値が高くなる。最終の第4セッションでは、IOPI＝100となり、撮影した全ての写真

に“対人関係”が現れるようになる。このような“対人関係”の発達パターンを『対人成長型』とする。これに対して、残りの1名（破線）は、初回のセッション以降IOPI値を上げることなく推移する。最終の第4セッションでは、IOPI＝0となり、撮影した写真の中に“対人関係”を反映したものが認められなくなる。このような形で“対人関係”が推移するケースを『孤立型』とする。

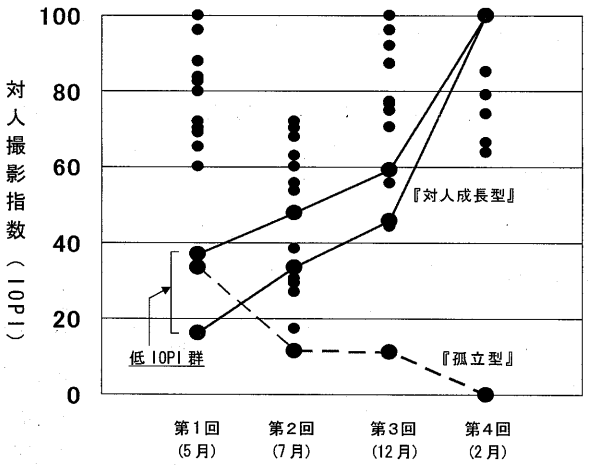


図4．低IOPI群の対人撮影指数（IOPI）の推移

これらの結果を実際の留学生の姿と照らし合わせると、以下のように理解することができる。山村留学生の中には、留学当初、“対人関係”への関心が表出されにくく、消極的に見える留学生が一定数認められる。このような留学生も山村留学が提供する緊密な人間関係を体験することで次第に積極性を増して、最終的には豊かな“対人関係”を獲得することができる：『対人成長型』。しかしながら、集団に乗り切れず、“対人関係”を広げることのないまま留学生活を終えるケースも生じ得る：『孤立型』。

以上のように、留学生が撮影した写真を分析することによって、山村留学生（小学生）が示す“対人関係”のパターンには、『他者依存型』、『自立型』、『対人成長型』、『孤立型』の4類型が認められる。

4－2　中学生が撮影した写真の分析

図5に年間を通した中学生（6名）のIOPI値の推移を示す。各々のプロフィールには共通点が認められず、小学生で見出されるようないくつかのパターンに整理することは困難である。このことは、中学生における“対人関係”のあり方が小学生と比較して、より個別性を増していることを示す。

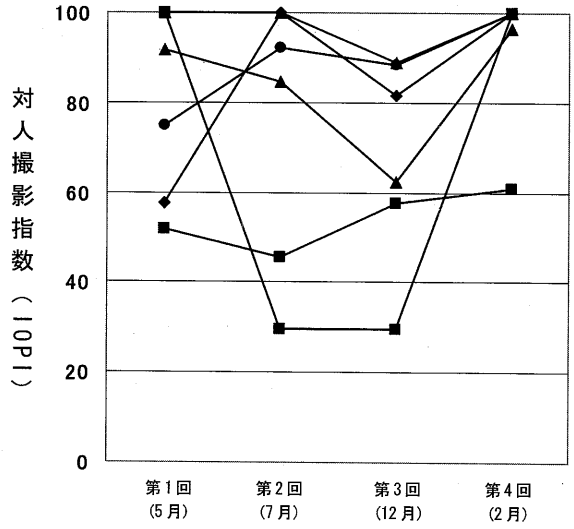


図5．中学生の対人撮影指数（IOPI）の推移

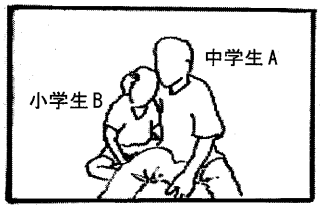
また、中学生では撮影に乗り気でなかったり、明らかに関心のない対象にカメラを向けて繰り返しシャッターを切ったり、わずか10数分で全てのフィルムを撮り終えたりといった、小学生には見られない撮影行動が認められる。直接本人たちに確認したわけではないが、大人からカメラを渡されて写真を撮ることをある種の“課題”と感じて拒否的に

なったり、撮影した写真が見られることを“評価”と感じて尻込みしたり、心のうちを覗かれるようで嫌だったりといった、思春期ならではの自意識が様々な形で心理的な抵抗を引き起こし、小学生のように無心にシャッターを押すことを難しくしている場合が多いと推察される。

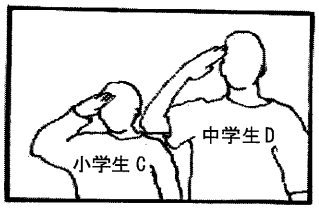
その一方で、中学生の写真には、“対人関係”において小学生の写真とは異なった特徴が示される場合もある。

図６は、複数年の留学経験を持つ中学生Ａが仲間にカメラを渡して撮影させた写真を略図化したものである。Ａが横に座らせて頭を抱いているのは、今年度はじめて山村留学した新人の小学生Ｂである。Ｂは、Ａに顔つきが似ていることから、留学してすぐ、“Ａの弟”と呼ばれて、いい意味で周囲の者にからかわれた。Ａもそれがまんざらではなかったようで、このことをきっかけに、ＡはＢのことを気にかけてかわいがるようになった。この写真からは、中学生の先輩Ａが小学生の後輩Ｂに自らの新人時代を重ね合わせ、特別な関係を結んで援助しようとする心理状態を読み取ることができる。

図７は、小学生Ｃが仲間に撮影してもらったものであるが、先輩の中学生Ｄの隣に立ち、同じ敬礼のポーズをとって画面に収まっている。略図には表われていないが、Ｃの照れくさそうな顔が秀逸である。この写真からは小学生の後輩Ｃが中学生の先輩Ｄを憧れの対象にして真似ることで、先輩Ｄに同一化して成長を遂げたいと感じている心理状態が読み取られる。



図．６



図．７

５．考察

５－１　“対人関係”が持つ二面性と山村留学生の“心の揺れ”

本研究は、山村留学を単なる“自然体験”の場と捉えるのではなく、“対人関係”を通して留学生が“心の成長”を遂げる生活体験の場として捉えなおすことを目的に行われたものである。留学生が撮影した写真からは、山村留学生の内的関心が強く“対人関係“に向けられていることが示される。山村留学生が撮影した写真の70％が「人物」あるいは「人物」を含む情景であるという結果は、都市部の子どもたちが撮った写真には人が写っていないものが多いとする野田（1988）の報告や、青少年が最も多く撮影したのは「モノ」、次いで「自然・風景」で、「人物」は20.9％だったとする都筑（2005）の報告と比べて大きな差異がある。時代や対象年齢が一致していないため直接の比較はできないが、山村留学が提供する密度の濃い人間関係にふれることを通して、留学生の内的関心の対象が、“対人関係”に強く向けられるようになっていることが示唆される。

都筑(2005)は、青少年を対象とした写真投影法による研究を通して、撮影者が最も多く撮影したものと撮影者が最も好きなものとは必ずしも一致しないことを指摘している。この知見からは、山村留学生が「人物」を含む写真をたくさん撮影したからといって、必ずしも“対人関係”を楽しんでばかりいるわけではないという視点が導き出される。本来、人間どうしの関係は、楽しさや心の支えを提供する一方で、対応の仕方を誤れば葛藤や孤

立を招く二面性を持っている。山村留学センターでも、仲間と楽しそうに遊ぶ子どもの姿とともに、喧嘩やホームシックが日常的に認められる。そうした“対人関係”の二面性を体験することを通して、子どもたちは、良好な関係を維持して、不適切な関係を改善するスキルを学んでいく。

また、本研究で筆者らは“対人関係”への指向性を量的に示す対人撮影指数（IOPI）を新たに導入して、留学生の“対人関係”への指向性の経年変化についても検討し、留学生の“対人関係”への指向性が、夏期に大きく低下することを見出している。このことは、田舎の自然が夏に最も美しい様相を見せることとも関連していると思われるが、上述した“対人関係”の二面性を考えれば、山村留学の開始時から一生懸命周囲に合わせて仲間作りをしたり、新たな環境に適応する努力を重ねたりした結果、留学生が少し疲れて“対人関係”を一休みする時期が、帰省を控えて気がゆるむ夏休み前と重なり、夏期に“対人関係”への指向性が低下すると理解することができる。留学生は留学生活の中でとても頑張っている。IOPI 値の揺れは、山村留学生たちの“対人関係”をめぐる頑張り、疲れ、再奮起といった“心の揺れ”として理解することがふさわしい。

５－２　さまざまな個性を持った子どもがいることの大切さ

小学生の IOPI 値を個別に分析することで、同じ山村留学生でも“対人関係”における積極性にかなりの個人差があることが示される。いじめや不登校に伴う内面的な問題を抱えて山村留学をする子どもが増加している（川前・玉井, 1997、川前, 1998）という指摘もあるように、繊細だったり、不安を抱えていたりして、スムーズに仲間との関係に入れない子どもが一定数存在することは、山村留学一般に認められる現象である。本研究の IOPI 値の分析から、“対人関係”に消極的な留学生が次第に積極性を増して、最終的には豊かな“対人関係”を獲得する『対人成長型』の存在することが示される。こうした結果は、不登校だった子どもが山村留学を通して仲間や信頼できる大人に出会い、学校に行けるようになる場合が稀ではないと感じている現場の実感と一致する。

また、“対人関係”に関して消極的に見える留学生は、他の多くの留学生とは違った視点や行動パターンを持っていることが多く、それが周囲に受け入れられない場合には不適応の原因を形成するが、逆に、“面白い子”として認められると人気者になるケースも多い。さまざまな子どもがそれぞれの持ち味を認め合いながら仲間でいられることを経験することは、“対人関係”に積極的な子どもが視野を広げる上でも大切である。

一方で山村留学は、主として子ども集団が持つ影響関係を通して“対人関係”の発達を促すため、留学生たちの間に子どもの調整能力を超えたズレが存在する場合には、有効に機能しないことも予想される。本研究で『孤立型』の“対人関係”パターンを示す児童は、周囲からの働きかけに応じて仲間と活動をともにすることはできるが、自分から適切な形で仲間に働きかける能力を十分に獲得できていない。筆者は、実際にこの児童に接して、決して山村留学体験がマイナスになっているとは感じなかったが、一方で、もっとふさわしい成長の場はなかったかとも考えた。さまざまな事情が関係する問題ではあるが、その子どもの成長のために最もふさわしい場としてどこを選ぶのか、子どもの特性を見極めて適切な判断を行うことは、大人に課せられた重要な責任であると考える。

５－３　“対人関係”を広げる、周囲と協調する、自分のペースを獲得する

IOPI 値の分析から見出された山村留学生（小学生）の“対人関係”パターンのうち、『対人成長型』、『他者依存型』、『自立型』の三類型は、それぞれ留学生の“対人関係”の発達における三つの段階を反映している。すなわち、まず小さかった“対人関係”を広げる段階、次に周囲に合わせることを覚える段階、最後に周りに合わせつつも振り回されずに自分のペースを保てる段階である。

『自立型』の留学生が全て留学２年目あるいは３年目の６年生であったことは、山下他(2007)が、山村留学の１年目を「ルールを守り、周囲に合わせることができるようになる受動的段階」、２年目を「リーダーシップをとることができて、自分の個人的な関心も追求できる自立的段階」と位置づけた結果と一致する。

山村留学はそれぞれの留学生の発達段階に応じて、さまざまなレベルで“対人関係”を広げる機会を提供している。

５－４　内面理解の手法としての写真

筆者らが写真投影法を採用する理由として、研究に参加する留学生の心理面に着目すると、自由に写真を撮るという課題は子どもが「何かのテストをされている」と感じる心配が少ないと考えられることと、投影的手法として一般的な描画法は絵が苦手な子どもには辛い課題であるが、写真なら抵抗なく取り組めると期待できることがあげられる。小学校における学級カウンセリングに写真を利用した事例（寺田・白石, 2000）でも「写真は子どもに人気が高かった」と報告されているように、今回山村留学に適用した場合も、写真は、留学生に対する心理的な侵襲性が比較的低く、楽しんで取り組んでもらえる手法であることは確かであった。しかしながら、中学生への活用については、今後に課題を残した。

写真投影法は、撮影内容そのものに関する質的な分析と、撮影内容を様々な形で数値化したうえで行う量的な分析の双方を行うことが可能であるが、本研究では、量的な面に重点を置いて分析を行った。留学生の心理的特徴をまず全体傾向として把握したいと考えたからである。しかしながら、小学生においては、全体傾向にとどまらず、留学生１人１人の特性を理解する上で有効と思われるいくつかの“対人関係”上の類型を抽出することができた。今後は、投影的な側面から質的な研究を進め、写真に現れる山村留学生の心のありようについて、より多面的な理解を深めることが課題である。

５－５　異年齢集団であることの大切さ

中学生の写真からは、山村留学生の間に、互いを“兄弟・姉妹”のように感じながら“心の成長”を遂げる関係が存在していることが見出される。背景としては、山村留学生集団が、小学生から中学生までの幅広い年齢層を含む異年齢集団である点を指摘することができる。乾（1980）は、同年齢の関係だけでなく、“兄弟・姉妹”のような関係を結ぶことのできる異年齢の対象が発達促進上重要であることを指摘している。筆者も、保護者が子どもを山村留学させる理由のひとつとして“一人っ子”であることをあげる例に何度も出会っている。少子化が進む中で、現代の子どもは、異年齢の存在との関係を通して当然身につけるべき“健康的な退行（適切に依存できること：図６のパターン）”あるいは“健康的な理想化（適切な目標を持つこと：図７のパターン）”という、より安定した発達の基盤となる“対人関係”を経験することが難しくなっている。それだけに、小中学生を含む異年齢集団で営まれる山村留学が、兄弟・姉妹が少ない（あるいはいない）現代の子どもたち

に、学級などの同年齢集団では体験することのできない、より発達促進的な関係を提供している意義は大きい。この点からも、現代の社会や学校が抱える様々な問題点を再考するうえで、山村留学がもつ役割や機能を詳細に分析することが重要であると痛感される。

6．まとめ

川前・玉井（2005）は、山村留学の可能性として、留学生が人間的な信頼感、協調性、創造力、自立心、生活力など、人間が生きていくための“基盤”となるさまざまな能力を培うことができる点をあげている。岩国市本郷をフィールドとした本研究でも、山村留学生が、社会のなかで生きるために欠かせない“対人関係”をさまざまな形で学び“心の成長”を遂げる様相を、これまで山村留学には適用されたことのない「写真」という手法を使って理解することができた。

子どもの生活体験が希薄化し、“心の問題”が指摘されている現代社会において、山村留学が果たす役割について様々な角度から理解を深めていくことは、今後、一層重要な意味を持つ。

また、本研究で示された山村留学生の“対人関係”のあり方や“心の成長”の様相は、今回、研究の対象とした特定の集団において見出されたものであることから、集団の成員やフィールドが変化すれば、現れる“対人関係”の様相も異なることが予想される。山村留学生に普遍的な“心の成長”のあり方と、1つ1つの留学生集団に固有の心理特性の双方について理解を深めるためにも、様々な山村留学生集団や子ども集団を対象にして同様の研究を行うことが、今後必要である。

文献

乾吉佑(1980)：青年期治療における”new object”論と転移の分析，青年の精神病理２（小此木啓吾編）．弘文堂．

川前あゆみ（1998)：山村留学研究の到達点と今後の課題　－諸階層による山村留学の評価と矛盾の克服意識を通じて－．社会教育研究，17, 61-73.

川前あゆみ・玉井康之(1997)：子どもから見た山村留学の評価と体験学習が果たす役割　－北海道Ｓ町を事例として．釧路論集，29, 271-285.

川前あゆみ・玉井康之（1998)：山村留学修了生の保護者の意識とへき地小規模校の役割．北海道教育大学紀要（教育科学編），49(1), 33-48.

川前あゆみ・玉井康之(2005)：山村留学と子ども・学校・地域．高文堂出版社．

中森千佳子・和田乃里子・徳永好治（1998)：山村留学の効果（第１報）－美利河小学校山村留学生の変化を中心に．僻地教育研究，52, 1-12.

野田正彰（1988)：漂白される子どもたち．情報センター出版局．

玉井康之(2006)：現代におけるへき地・小規模校教育の特性と“へき地”のパラダイム転換の可能性（玉井康之編著，子どもと地域の未来をひらくへき地・小規模校教育の可能性．教育新聞社，22-30).

寺田治史・白石大介（2000)：学級カウンセリングにおける写真対話法の開発．日本教育心理学会総会発表論文集，42, 517.

都筑学（2005）：写真投影法による青少年の内面把握の試み．教育学論集，47, 223-249.
山下稔哉・仲程誠・佐古三代治・木谷秀勝（2007）：“田舎体験”と子どもの精神的自立　－山口県岩国市本郷における山村留学の20年を通して－．山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，23, 133-142.
財団法人育てる会（2001）：山村留学25年白書　昭和51年度～平成12年度の全国の山村留学実施状況調査.
財団法人育てる会（2006）：全国の山村留学実態調査報告書　山村留学30年間のあゆみと未来展望・平成17年度の全国の山村留学実施状況.